



初懐糸

全卷

百韻

日乃斗カスカ流石小舟の歩

元朝の日乃斗カスカ流石小舟の歩

長閑小遊カスカ去るか舟もも

乃あゆもよかけくついで

志し文云航カスカ云ふか舟もも

流石小舟カスカ流石小舟の歩

柳小舟カスカ流石小舟の歩

其鱗

其角

貞徳老人曰ク朕所四通りし
立つ所物は其當時古くありし
唯發句小しと云ふ事あり
と云ふ此の事なりしは格柄
をく立てて志望もあつたの候
柄は其実入本末小なりき
之も唯しくいふ言ふ細く
柄の實とよきを柄乃木とい
んも同しなりし元朝は猶冬
先程く事柄はつ候候と云
煙しそありと朝日少くし出

おろろこしん思へ候所なる
へし且つ柄の實を足所く
何そしし誰活入りし
形ありし候あり

雪
柄の柳より小し梅より

積風

中三長きく風流小くはれ候
發句乃系と云ふ候あり柳
小しと云ふはしりし系小断
て雪村を昼入若葉の柳を
時を其のそふ柳をそそ
自り舟小梅よりして出る者

室く旅妻げめのなるむら緑

山化

舟歌ふみある一戻電の舟を初冬
の未暮月えし思の流あとの神
交る冬の畑有秋をいひの海
思く舟を流く旅妻げめのなるむら
海く舟流く舟不大功あり流く舟
へす不し重く舟んき岩白たり
も詮ふらへー

我系ぶ弱小雨おのひ路よ

李下

そり奇念し何をもりふとそ
形くソりもを詠あつとさあ里く

旅妻とふく旅神をいおし
おら流あそくし歌をいさんり
雨を怪し物さこまら并あさす
筆頭小市樹

初あつて三流を洋む道あまは

奉白

是時一き舟車あくて作者乃
おく流あそくし歌をいさんり
あうへーを旅神を箱根おし
てまらそくし歌をいさんり
人深切おし

急佛よねみ僧いづくる

朱炫

世の借ふ真を影を寄るに神社
よとて佛者を忌むのあはれはつた
神がよき物なれば立寄れ可申ふ
まに社ありては道通り入僧とあ
へす事あり

浅るしの連立の真とすまはる

蚊足

連立の真とすまはるを身振つた
かゝる事なく五人の上より
ある事なく一入派をよめる

歌も平ぶしらすと乃声

千代

ア、そふの別とあゝ連立の

軍場とくそふをきまはし

石川小梨子馬帽子若くも

芭蕉

所候ふ条あり前々軍の真小
して又一句すふといたり軍
小梨子馬帽子とあゝいきを
所候う候くして一々の姿は具
服を所し思ふ

淳世乃ち馬と宴の思ひもん

筆下

前々馬の中より所はれあり
馬帽子を看するといふと都る
世も接といふ心をたのむ備

命を甲斐の沢と色は

積

後乃聲此忠くありし山川乃
をきくくはは海も神形容
をふれり所便を山歌をあり

法の上我利髪を埋おの

秋

笑のあやしくおまじまきとん
て身乃無常と歎したるに甲斐
とつ古入佛有古証多る自
無常をたひくありあり利
髪を埋るる事は忘るる

そを衣をよき

そののし如記をこほり中の

童

別をなするを庵温者乃神
はもさるる風流あり

巧く回ると車かきゆるは乃

下

前乃温者乃神をひりて
友は流すてかきはむ人のい
しはは車と日こすかき
展る解し唯句母乃作の和
かき流するは目をかき

橋を小雨をゆる

化

夜半一息ありて扇をくく
ておのゝあはれも中し己ゆる
研
あり

元々眉をかくよまはく

蕉

秋の帯をいあはれも
あはれ元々眉をといふ
てあはれも秋をいふ
風記て扇守内をいふ
んやまはれの條情をいふ

嬰子嘆て情ふ己ゆる若くもあ

積

元々眉をいふ
んやまはれの條情をいふ

たははくて殿の屋をといふ
は伊は秋の嬰子嘆て情ふ己ゆる
あはれも秋をいふ
あはれも秋をいふ
あはれも秋をいふ
あはれも秋をいふ

元々眉をかくよまはく

斎

夫は秋といふ言はれ先
前今作自身をいふ
者さもら同治
元々眉をいふ

唇白し臥し中情なる人
亭すく小野入浮舟をえきた
ふあときあはれし人さきしとも
其の故事やしよよき所は其の
屏風よりうづらとあのみか
すくあはれ

かきとく下は結樹をふれむ

角

菖蒲のあつふあつくとく
ふらふらふ風情をぬき
あつあつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつ

あつ月之夜乃星は筆

鱗

冬の夜は雪は清く神をいひの
竹の筆はあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつ

石戸通鶴馬の坊を音す

白

白雪を雪とよみあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつ
あつあつあつあつあつあつ

やう鶴小須エの浦十市の里

野・里・玉川・か・く・舟・下・院・奇・小
役・して・竹・丸・雪・の・那・須・野・世・系
雪・の・富・士・月・ふ・更・斜・と・舟・信・の
と・舟・信・の・舟・信・家・の・舟・信・の
所・を・の・舟・信・の・舟・信・の
舟・信・の

我

三代・其・刀・所・鋳・次

下

其・の・海・の・奇・持・の・舞・の・心・人・く
い・は・は・く・の・信・の・信・の・信・の
所・の・舟・信・の・舟・信・の・舟・信・の
舟・信・の・舟・信・の・舟・信・の

先・々・と・た・く・清・水・院・清・水・の
を・あ・る・先・録・録・を・あ・へ・は・と・あ・ひ
う・う・と・感・情・を・あ・へ・は・と・あ・ひ
三・代・と・い・は・る・舟・信・の・舟・信・の
人・と・い・は・る・舟・信・の

永・録・を・今・之・の・舟・信・の

化

永・録・を・今・之・の・舟・信・の
舟・信・の・舟・信・の・舟・信・の
舟・信・の・舟・信・の・舟・信・の
舟・信・の・舟・信・の・舟・信・の

歌味す趣し

近江の田植茶種之類

弦

唯上竹種乃白あり今を乞し
此子ふらうむしをふくいみ
へる物毎管略を今を乞し
事人こいひはる信る英流を乞
き都らまのふくし田植あとの
汎流を遠き心ひとを乞し
成へし

こく記す中樹の類

重

時を乞し心合を乞し

茶種近江ニテ所をいひて時を
を乞し種ふか種あまはる
ふくしこく記す中樹を乞し
とき中を乞し

船中茶の湯は浦良あり

鱗

子規を水辺川浦あまを乞し
今論あり船中を茶の湯信し
多敷風流を待し信る心
而も茶の湯は川茶の湯乃
好士あり信る心
中ありい

階の邊にあり

築紫より人の娘を石連く

下

けり能く何れもなき見是る
舟中の川流の娘を造入る
葉の落るてし橋の舟を
あつたしを味ひほくす
石浦の石所を築ひて我を
の君あつと望みぬたふ
よおのしつゝはく一人の
あつて余は限る

彌

都人堂より人の手

抄

洲のむやり舟を傳達とも急
の衣をぬくよはくう舟
舟の理はありある時
一向の流るる舟は
に

待のひは流るる舟の中

蕉

弥勒堂といふ時ハ観音堂
あといふ舟は舟を
忍びよの舟は舟を
陸地より舟の中
舟は舟を舟の中

燈しきみ又皇一うまひを
行ふに新し及びるうら
味いせし

友

友は小蟾乃毛の耳よけり声

化

友は小蟾近以信をよけり
州のみにききらるる友は
こゝにありてはかくかき
お声とつよめて侍候り
まはし

雨

雨は花いぢりさき色鄙

斎

蟾乃夢しといふく田家の神

いひのへし利雨と舟の事め
しりしはこゝにさき色は
らしきも常りよき
やしは古き歌の傳る
白の折く古歌古詩等の
あつたはしきもさき
すうらたはめやう侍
このこゝに

門

門は魚子次磯際の寺

白

鄙の解あはし源守の門
ふたはし細かたけけぬ

多々異なりし一丁を
却て作者此意の筆の

理不為小物論武有言六七

重

世の中は海をわたり
乱るは解民屋中へ押して
飯くはるは穢れは國の
かくまへしは事よは
世の中は操り女は心
誰かばらぬ合てく
角

あゝ野乃牧は御正

角

前乃は後りしは
とくはあそびは武士の
西ふし三句の
語りやうの
眼をこむ

鷄の一色夕日を月ふ

鱗

修や身やう文や
るやうはういひ流し
かぬの雲切者
ちくまの

長嘯の讀終より西行の業乃
戸の入り終をありぬらてせ
讀る月を二合せし一合を讀
ぬの長嘯の歌中奇の用ゆり
をいぬは終の事も俳諧の意
子如流をいふは流しは傍用
仍れを何の事もあはるるを
乃乃余情より月ひの事
し人知あり

乳乃結尾ノ秋寸サレシ

流乃乃字の事やまの事

下

月夕日夕の地をたしは加
利をさる

電乃本姑間より集の心を

白

秋の字をたしは流の事
巧者に佛の事
亂れり道はの事
勿論に本の事
幾多秋の夜茶の事

空乃那の事

白

洲の事や又一句の事
空乃那の事

卯如昇のる情ふもく絶る
作しふりさハ雀のさく
南而高直の如く露の
親と具名をくつ登のつ
餅作らあらの廣葉を牙合
贅も四貝おく秋のさく
二鹿乃音とあつぬ人
あさき男は新すむ月

重 水 不 下 蕉 下

管状而杖七をさぬ
停駒河内乃父の川流り
水車を流く音ハあ
梅を盛の院くの門

ト 水 角 干 春

二月八世蓮菜人も
姉侍午はあつ日ハ
物何の如く結をかり
そんあさき男は新すむ月

府 重 蕉 下

夏乃涼を 柵を ありありと
木負す 山 海あり
因人を やり 休む 朝月夜
秋より 出ぬ 長く 流るる
同じ時を ありと 流るる 名を
心あり せん 昔を 蟬の 鳴る
三むを ありと 昔を 橋 吉野山
何より ありと 牛 井 葛屋

下 鱗 下 鱗 下 鱗 下 鱗 下 鱗

名
傾城より 山 海あり
経より ありと ありと ありと
行の ありと ありと ありと
梅より ありと ありと ありと
村より ありと ありと ありと
蛇より ありと ありと ありと
伊勢より ありと ありと ありと
棒より ありと ありと ありと

下 鱗 下 鱗 下 鱗 下 鱗 下 鱗

信長の治まは世や夢ゆらん
若士も呼ばれり國は呪
江に牡丹十里の香を合ふ
雲よりし春小出の湯をす
石根を重き城を花の河
名
りりや三井姑若法師と毛
りて戀ふあはれやのよ返り
爰に結ぶ心は清くははる

水 鑿 春 峽 角 齋 化 童

足曳姑草屋山の流る淋しき
千色囀ふは観音姑清若
舟ゆく川涼のあはれ川つら
女子のほし影雲のあはれ
麻苳姑七所は咲は草花の
連流をくまはるはくまはる

水 角 楓 峽 白

初懷帛

松凡芭蕉小釋之形亦白
水評芭蕉形神後四十句
多也一之評之也
一一松風如沙



一 松風如沙
一 水評芭蕉形神後四十句
一 多也一之評之也

凡例

一 四季の題を大抵玉海集に依り、
擬ひて四季の雜を其季の末に載す
一 連歌の用ひしる題ハ愚意よりおそそ

Handwritten text in cursive style, partially obscured by a large, faded stamp or watermark in the center. The text is arranged in vertical columns, typical of traditional Japanese manuscript layout.

